分　担　研　究　概　要

北九州市立総合療育センター
高　松　鶴　吉

概　要

日常の発達障害児に対する臨床経験から，私達は次のような原則があると考えている。

1. 親・関係者が発達障害の最初のサインとして気付くのは“運動のおくれ，ひずみ”である。これらのもののうち，正常になるものを除外すると，彼らは脳性麻痺か精神遅滞のいずれかになる。

2. 次に気付かれるのは“コムニケーションのおくれ，ひずみ”である。さかのぼれば異常はそれ以前より存在するが，これを主訴として来院するのは1歳以降となる。これらのもののうち正常になるもの，難聴があるものを除外すると，彼らは精神遅滞，行動異常のいずれかのコースを辿る。

3. 初期に運動とコムニケーションに異常がなくて，将来発達遅滞になる症例はいない。

このようなことから，早期療育訓練の方法は，①運動発達のおくれ，②そのひずみ，③コムニケーションのおくれ，④そのひずみ，の4つの課題に対応するものとなる。

次に方法論として私達は，“感覚運動発達の促進およびその組織化”という視点に依った。

臨床医学から発達をみると，構造面に対する各科の治療，健康につながる小児科的治療と管理，生化学的アプローチによる発達治療などがある。これらはそれぞれ重要な課題であり，興味もあるが，今回は発達を機能面でとらえるという立場に限定した。

以下，研究の成果を包括的にのべる。

まず私達は種々の発達評価表を再検討し，再構築し，その改良および標準化を試みてきた（安藤ら）。これは感覚運動発達的評価表ともいうべきもので，すでにチーム内で使用されている。今後は改善，標準化を更にすすめると共に，重要なキイとなる項目を浮び上らせ，スクリーニングにも使用できるものとしたいと考えている。

上記のように早期療育の課題を4つにまとめたが，そのうち“運動のひずみ”については，すでに脳性麻痺の早期治療という形で，研究，実践がすすんでいるので割愛した。

“運動発達のおくれ”に対しては専門運動療法士の貴重な戦力を用いず，もっと普遍的に実施できる方法としてLévyの赤ちゃん体操を取上げ，これを発展させた。ねらいとしては1歳未満の発達遅滞リスク児に対する“感覚運動学習法”の確立である。（安藤ら）

“コムニケーションのおくれ”に対してはチームの大貝らが1歳未満から言語発達を促すための評価と訓練の方法を模索してきた。これらはダウン症児を対象としたものであるが，勿論精神遅滞リスク児全体に汎化できるものである。

“コムニケーションのひずみ”については行動異常児の発達評価とそれぞれの発達目標に対応した援助の方法（阿部ら），および行動異常の幼児に対する感覚運動訓練の工夫と効果（坂本ら）を呈示した。早期に対応する方法としては，すぐれた方法ということがいえよう。なお久田らは精神遅滞と初期運動発達との関係を調査した。私達の臨床経験から，精神遅滞児には初期運動発達のおくれを示す群と示さない群があり，しかもその遅滞の状態像が異なるような印象をえたためである。

早期療育の方法というテーマを拡大して，地域における療育システムに関する考察も行った。56年度は人口100万余の地方都市における実践例を呈示したが（高松）今年度は前年にひきつづき人口過疎地域についての実践的研究を木佐がまとめた。更に今年度は熊本県という，わが国の標準的と思われる県の，県レベルでとらえた早期療育のシステム化についての報告も加えられた（星子）。同論文で星子がのべているように，このような広域圏におけるシステムの確立には，なお難問が山積している。以後も実践的研究のつみかさねを更につづけ，除々にわが国における障害児療育の向上をはかりたいと考える。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

日常の発達障害児に対する臨床経験から,私達は次のような原則があると考えている。

1.親・関係者が発達障害の最初のサインとして気付くのは.“運動のおくれ,ひずみ"である。これらのもののうち,正常になるものを除外すると,彼らは脳性麻痺か精神遅滞のいずれかになる。

2.次に気付かれるのは“コムニケーションのおくれ,ひずみ"である。さかのぼれば異常はそれ以前より存在するが,これを主訴として来院するのは1歳以降となる。これらのもののうち正常になるもの,難聴があるものを除外すると,彼らは精神遅滞,行動異常のいずれかのコースを辿る。

3.初期に運動とコムニケーションに異常がなくて,将来発達遅滞になる症例はいない。

このようなことから,早期療育訓練の方法は,①運動発達のおくれ,②そのひずみ,③コムニケーションのおくれ,④そのひずみ,の4つの課題に対応するものとなる。

次に方法論として私達は,“感覚運動発達の促進およびその組織化"という視点に依った。

臨床医学から発達をみると,構造面に対する各科の治療健康につながる小児科的治療と管理,生化学的アプローチによる発達治療などがある。これらはそれぞれ重要な課題であり,興味もあるが,今回は発達を機能面でとらえるという立場に限定した。